

平成30年度学生による地域フィールドワーク研究助成事業

研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名：富山福祉短期大学 幼児教育学科
- ・所属ゼミ：藤井ゼミ
- ・指導教員：藤井 徳子
- ・代表学生：本波 真弥
- ・参加学生：石黒 友唯 舘 優香 堂口 佳奈 堀井 優衣翔 増山 日和子

【研究題目】 利賀の豊かな自然を活かした自然保育プログラムによる子育て支援

1. 課題解決策の要約

利賀は、過疎化・少子化が進む山間地域であるが、子育て世代のIターンや「森の大学校」など、地域や自然を守るために様々なアイデアで取り組んでいる。一方、近年の子どもの育ちに関わる課題として、自然体験の不足とその重要性が再認識されているが、自然豊かな地域の子どもも例外ではない。自然の中で保育を行う「森のようちえん」は欧米で盛んであるが、日本でもその教育的効果だけでなく、地域づくりの面でも各自治体が注目し、行政支援の事例が増えている(長野県・鳥取県・三重県・広島県・山梨県等)。

そこで、この利賀ならではの特色を活かした自然保育プログラムの開発・実施により、子どもたちの自然体験を豊かにし、保育者や保護者の自然保育理解を深めるとともに、利賀の自然やその恵みを再発見し、子どもたちや子育て世代のふるさとへの愛着を育みたい。また「利賀のこどもたちの未来」をテーマにワークショップを開催し、保護者、保育者、地域の方々、学生が集い、自然保育や自然のなかでの子育てについて共に考え、語り合い、思いを共有したい。そしてその成果を、ミニブック「利賀のこどもの時間 AtoZ」として発行し、地域内外に発信する。以上の活動を通して、「子どもたちの生きる力」と「地域づくり」という2つの課題解決に挑む。

2. 調査研究の目的

2-1. 自然保育プログラムの開発

南砺市立利賀ささゆり保育園は、利賀村に唯一の保育施設であり、地域のほとんどの子どもたちが通園している。利賀ささゆり保育園の周辺や散歩コースは豊かな自然環境に恵まれているが、毎日の保育では特に自然保育を意識的に取り入れているわけではないとのことであった。そこで今回は利賀の地域資源を活用した自然保育プログラムを開発し、実際に子どもたちにプログラムを実施する。

2-2. 「自然を活用した子育て支援」による地域づくり

少子化、過疎化が進む利賀地域では、「次世代育成」と「地域づくり」は喫緊の課題である。そこで、子育て支援に関するさまざまなステークホルダー(子ども、保護者、保育者、地域住民、行政職員、学生)が集い、「利賀の自然・こども・未来」をテーマに思いを伝えあう場を設定し、これからの利賀の子育てや、その目

指す方向について相互理解する。

3. 調査研究の内容

3-1. 自然保育プログラム「森であそぼう！里さんぽ」in 利賀ささゆり保育園

私たち藤井ゼミでは、これまで自然保育をテーマにさまざまな自然保育の現場で実践を通して自然保育を理解し、自然保育技術を習得してきた。自然保育は場所や季節といった外的環境によっても、その活動内容が大きく左右される。そこで今回は、利賀の地域資源である豊かな自然を活用した自然保育プログラムを開発したいと考えた。

11月5日のプログラム開催に向け、10月29日に現地下見を行った。利賀の自然に詳しい中西さん(利賀飛翔の会理事長)、江尻さん(TOGA 自然大学校事務局長)、谷戸さん(利賀ささゆり保育園保育士)に案内していただいた。

保育プログラム開発にあたっては、以下の4点を大事にしたいと考えた。

- いつでも、何度でも遊んで楽しめる(毎日のさんぽ時に遊べる)
- 秋ならではの自然を感じられる
- 0歳児～6歳児10名が、それぞれの発達段階に応じて楽しめる
- 地域資源を活かす

これらを考慮し、利賀ささゆり保育園のオリジナルプログラムを開発した(別紙1)

11月5日当日は、天気にも恵まれ、爽やかな秋晴れとなった。当日も早い時間に現地に行き直前の下見を行い、危険な箇所がないか確認して、本番にのぞんだ。

子どもたちと学生は初対面だったので、お互いに自己紹介をしたり、「森の準備体操」で楽しんだりして(図1)、仲良くなってから出発した。出発前に「森で小枝パチンコをして遊ぶこと」「中西さんが飼っている子ヤギに葉っぱをあげること」を子どもたちに伝えていたので、子どもたちはどんぐりや、おいしそうな葉っぱを探しながら進んでいった。



図 1

途中アスファルトの舗装道路と山道に分かれるところがあり、いつものさんぽではアスファルト道路に行くことになっていると事前に園から聞いていた。そこで子どもたちに「アスファルトの道と、草がいっぱい生えてる道、どっちに行こうか？」と尋ねてみた。すると子どもたちは草のいっぱい生い茂っているほうの道を選択した。子どもによっては自分の背丈よりも高い草が茂っていて、前もよく見えない道だったが、どの子も一生けん命自分の選んだ道を歩き通し、藪を抜け出たときには来た道を振り返ってなんとも清々しい達成感にみちた表情をみせていた。

ススキがたくさん生えているところで、学生がススキ投げをやってみせた。子どもたちも次々にやってみる(図2)。遠くまで飛ばせる子、あまり飛ばない子。そのうち、得意な子がまわりの子に飛ばすコツを教え出した。よく飛びそうなススキを探して茂みに入っているうちに赤く熟れたホオズキを見つけ、すっかりホオズキに夢中になっている子。どんどん遊びが変化していく。一番盛り上がったのは先生対決。元バトミントン部の先生と、元ソフトボール部の先生が、やり投げ選手になりきって本気モードでススキを投げると、子どもたちは先生たちに大声援を送っていた。大人の遊び心は、子どもたちの遊びをもっと楽しくさせてくれる。



図 2



図3

山道を歩いていると、どこからか甘い綿菓子のような香りがしてきた。「あれ？おいしそうなおいがするよ」「森でおやつ作ってるのかな？」子どもたちもみんな香りに気付いてきょろきょろとあたりを見回す。桂の木の落葉から甘い香りがしていることを伝え、みんなで桂の木を囲んだ(図3)。学生が利賀坂上の民話「桂の木のじぞうさま」を素語りすると、子どもたちはじっと聞いていた。その後子どもたちは木の洞に入ったりのぞきこんだりしていた。

中西さんのヤギ小屋に到着。子どもたちは最初は遠くから子ヤギにむかって葉っぱを投げたり、遠い地面に置いたりしていたが、周りの大人や友だちの様子を真似て、しだいにヤギの口元に葉っぱを持って行って食べさせられるようになった(図4)。またヤギが好きな葉っぱと嫌いな葉っぱに気づき、「ヤギは三つ葉が好きなんだよ！」と発見して教え合う姿も見られた。

子どもたちは自然遊びに夢中で(図5)、予定よりも長い活動時間になってしまったが、子どもたちは帰り道も疲れたそぶりをみせず、「ヤギさん、いっぱい葉っぱ食べてくれたね」「桂の木におじぞうさんいたね」とたくさんおしゃべりしながら園に帰り着くことができた。



図4



図5

3-2. ワークショップ「利賀のこどもたちの未来」開催

開催に先立ってまず心掛けたのは、「利賀の人たちが主体となって子育てを考える場」づくりということである。そこで事前に、利賀ささゆり保育園の保護者有志に集まっていただき、自然保育や、日本での自然保育をめぐる状況を説明し、保護者の方々の子育てに関する関心事や困り事などを聞かせていただいた。保護者のみなさんは自然保育やワークショップについてとても関心を寄せてくださり、またこのときに、一番地域のみなさんが参加しやすい日時を教えていただき、その日をワークショップ開催と決めた。その後ワークショップ開催のチラシを作成し、利賀地域に配布して地域のみなさんにお知らせした。

ワークショップ開催のチラシを作成し、利賀地域に配布してお知らせした(別紙2)。

11月30日(金)18時30分、平日夜にも関わらず、子どもたちも連れて家族全員で参加してくださった方、独身の方、赤ちゃんが生まれたばかりのご夫婦、元保育園園長など、さまざまな世代の方々30名が集まってくださった。

第1部は、映画「こどもの時間」を上映した。これは野中真理子監督のドキュメンタリー作品で、主人公は、埼玉県にあるいなほ保育園に通う子どもたち。ここに登場する子どもたちのスクリーンにおさまりきらない圧倒的パワーやバイタリティに、本来あるべき子どもの姿を見る思いがした。

第2部では、ワールドカフェ「自然・こども・未来」を行った(図6)。5~6人のグループに分かれて「えんたくん」を囲んで(図7)、利賀の子どもたちにどんな「こどもの時間」を贈りたいか、大人たちはどのように「こどもの時間」を見守ってあげられるのか語り合った。「えんたくん」というのは簡易式の円卓ボードで、これを囲むと誰とでもすぐに話が弾むという、それは便利なファシリテーター道具である。おかげで今回もどのグループでも熱心に語り合い、それぞれの思いを共有することができた。



図 6



図 7

4. 調査研究の成果

4-1. 自然保育プログラム「森であそぼう！里山さんぽ」in 利賀ささゆり保育園

子どもたち

- 利賀ささゆり保育園は園児10名の小規模園ということもあり、「おねえちゃん先生」がやってきて、一緒におさんぽにでかけるというだけでも特別感があつたようで、とても嬉しそうであった。
- 「自分で考え自分で決める」場面や、「挑戦する」場面を設け、子どもたちが主体的に活動できるプログラムであった。
- 最初は0歳～6歳という発達段階の大きく異なる子どもたちが一緒に活動するというに少し不安があつたが、互いに教え合ったり、真似たりして、多様な人間関係の中で学び合い助け合う姿がたくさんみられた。

保育者

- 「森の準備体操」「バンダナバッグ」「ススキ投げ」「小枝パチンコ」といった自然遊びや小道具は保育者にとっても新鮮で楽しい経験だったようである。自然体験が不足しているのは子どもだけでなく、県内の保育士アンケートでも、多くの保育士が「自然遊びが苦手なので、自然保育は自信がない」「自身の保育では、自然保育が質・量ともに足りていない」と感じている。そんな現状において、本事業のように、短大や自治体、保育園が協働して、自然保育プログラムを実施するのは、保育者の学びという意味でも大変意義があることがわかる。
- 「地域資源を活かす」ことは今回のねらいの一つであったが、中西さんの子ヤギたち、巨大なカツラの木とその民話など、いつものおさんぽコースにすばらしい自然保育資源があることがわかった。
- 学生(教員)たちが加わるので、大人の目が行き届くというメリットがあり、保育者たち自身が自然遊びを満喫する余裕がうまれた。

4-2. ワークショップ「利賀のこどもたちの未来」から見えた成果と課題

- 映画「こどもの時間」で、いなほ保育園のどこまでも自由な保育や主体性あふれる子どもたちを見ると、保護者たちはみな口を揃えて「こんな保育をうちの子たちにやってほしい！」と言い、保育者たちは「ありえない」と言っていた。このように立場が違えば、責任の大きさも異なってくる。
- 「こどもの時間」という視点でさまざまなステークホルダー(保護者、保育者、地域住民、学生等)が語り合えたので、それぞれの思いを共有することができた。
- 自然保育の魅力や、利賀でこれからもっと自然保育を普段の保育に取り入れていくことには全員の思いが一致していた。
- 子どもの人数が少ないことから、子どもたちの社会性が育ちにくいのではないかと心配する声があつた。これについては、里山さんぽのとき、初対面の学生に対しても子どもたちは大変人懐っこく、社交的で、また子ども同士でも家族のような温かさで互いに協力し合う姿がたくさん見られた。
- 子どもたちには自然体験や生活経験など、たくさんの実体験を積んでほしいと願っている。

- ただ時代の風潮もあり、けがをしないように、だめと禁止したり、先に危険因子を取り除いてしまったりしがちである。少しぐらいのケガをしながら、子どもたちは自分の限界を知り、危険を予測できるように学んでいくのである。
- 「ワークショップに参加したおかげで、利賀の子育てを選んでよかった！と改めて思うことができた。」「今回のワークショップをイベントで終えるのではなく、自然保育のキックオフとして、これからますます学生たち(大学)と交流を続けていきたい」といった参加者の声があった。
- 本事業のまとめとしてミニブック「利賀のこどもの時間 AtoZ」を作成・発行した。このミニブックによって、私達が利賀村で感じた自然の豊かさ、利賀の人々の温かさ、子ども達の素直さなど、利賀の魅力がたくさんの人に伝わって、利賀ファンが増え、利賀で子育てをしたいと思う人や、利賀を訪れる人が増えることを願っている。

5. 調査研究に基づく提言

自然保育は、これからの保育のキーワードとされる「子どもの主体性を育てる保育」「環境を通して行う保育」にまさに合致したものである。自然豊かな利賀は大きなアドバンテージがあり、地域づくりにおいても、この点を子育て支援として力を入れて取り組み、大いにアピールしてほしい。

また、今回のワークショップでは、保護者・保育者・地域住民・行政職員・学生と、さまざまなステークホルダーが集い、語り合い、思いを共有できたので、今後も、大学・行政・地域の三者が協働して、自然保育を柱として子育て支援および地域づくりへの取り組みを進めていければと期待している。

6. 謝辞

本研究事業において、TOGA 森の大学校事務局長江尻美佐子さんには大変お世話になりました。最初に私たちがどんなフィールドワークを考えているかお伝えしたところ、さまざまなアドバイスをくださり、また関係各所にお話を通してくださったり、里山さんぽの下見やワークショップ開催への準備など、利賀に暮らし利賀に精通している江尻さんにご支援いただけたことはとても大きな助けでした。

また、利賀ささゆり保育園、富山森のこども園、中西邦康さん、南砺市こども課にもご支援ご協力いただけたこと、感謝いたします。

そして、里山さんぽと一緒に楽しく活動してくれた利賀の子どもたち、平日夜にも関わらず熱心に語り合ってくださいました。利賀地域のみなさま、どうもありがとうございました。